

山がらす

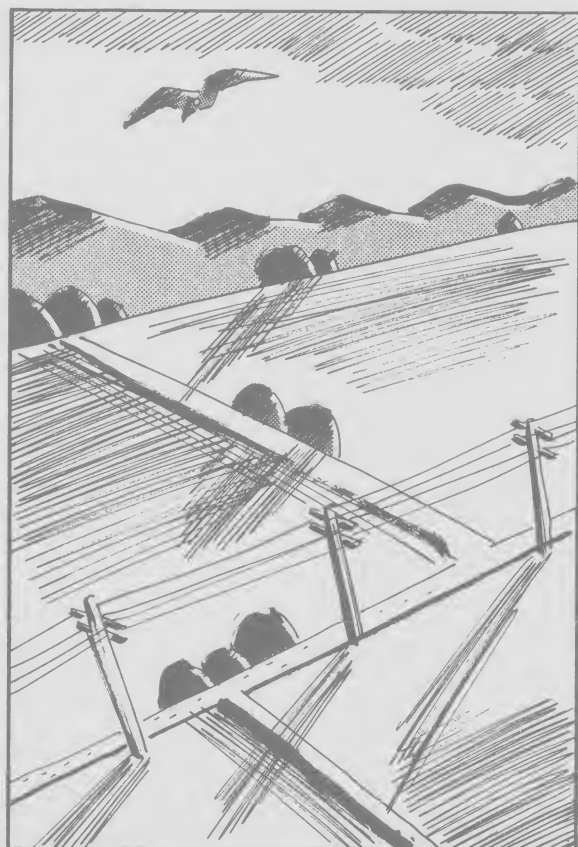


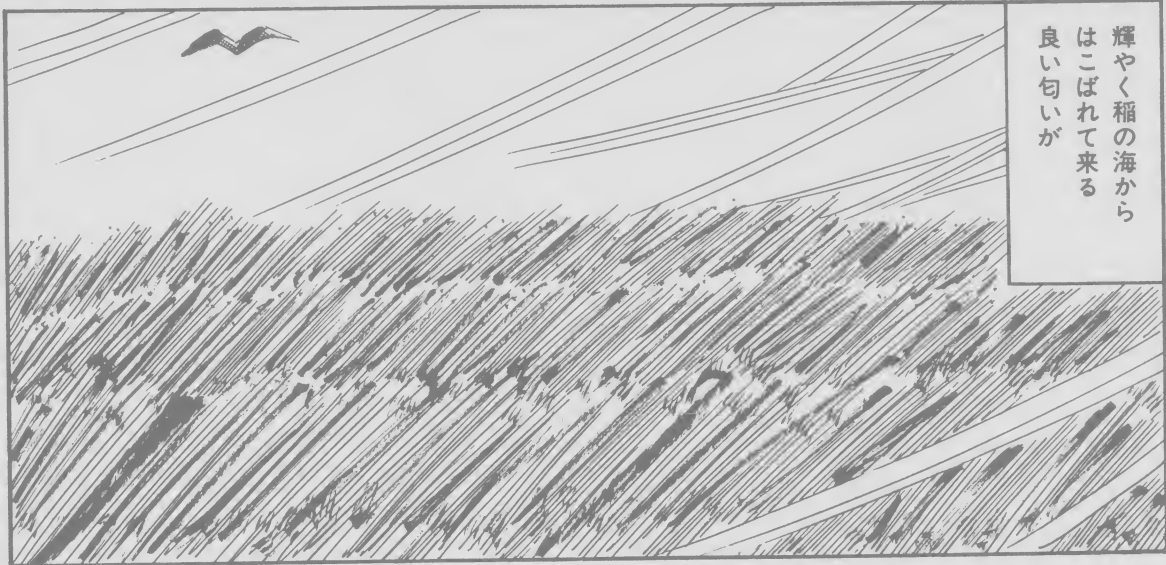
流れ星通信工房
三橋乙擲

ある晴れた日の
午後



山がらすは
里におりて来たのだった





輝やく稲の海から
はこばれて来る
良い匂いが



時刻まで彼は

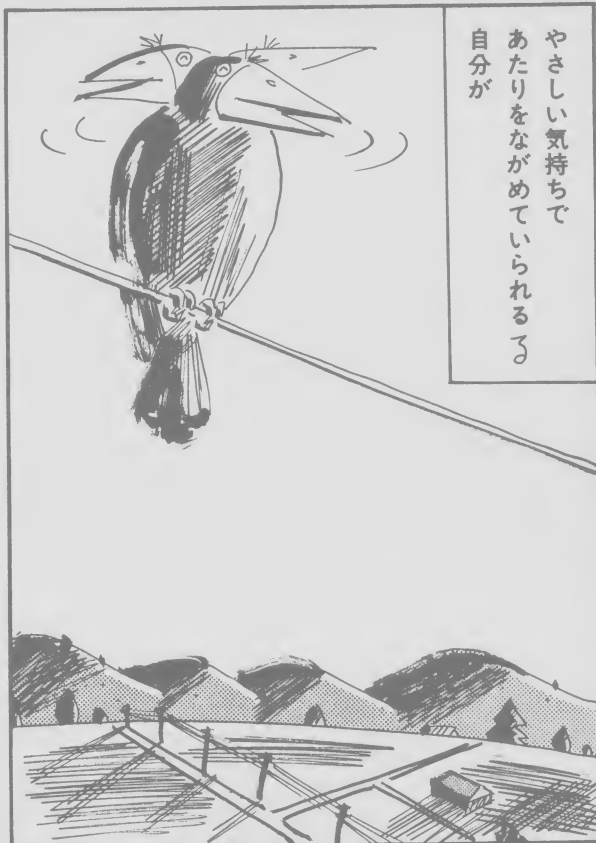


彼をなつかしい
気分にもさせたの
だろう

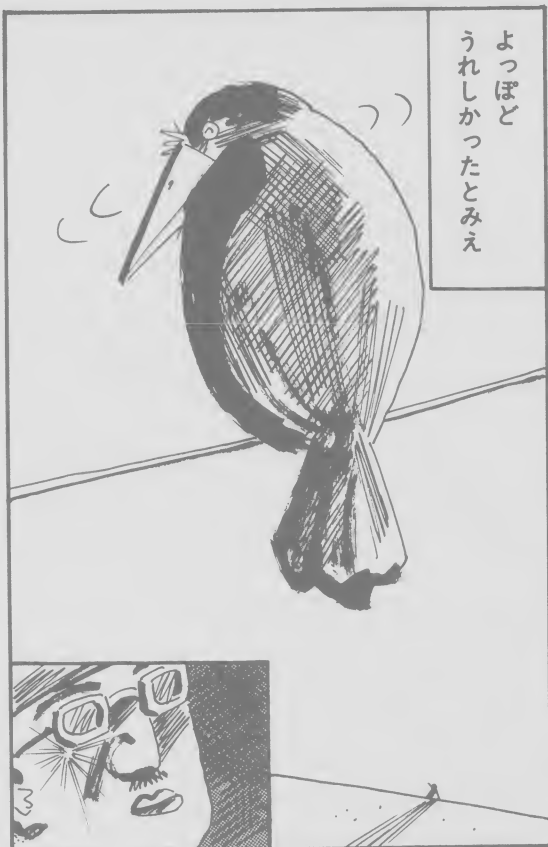


あちらこちらと
楽しみに飛びまわって
いたが

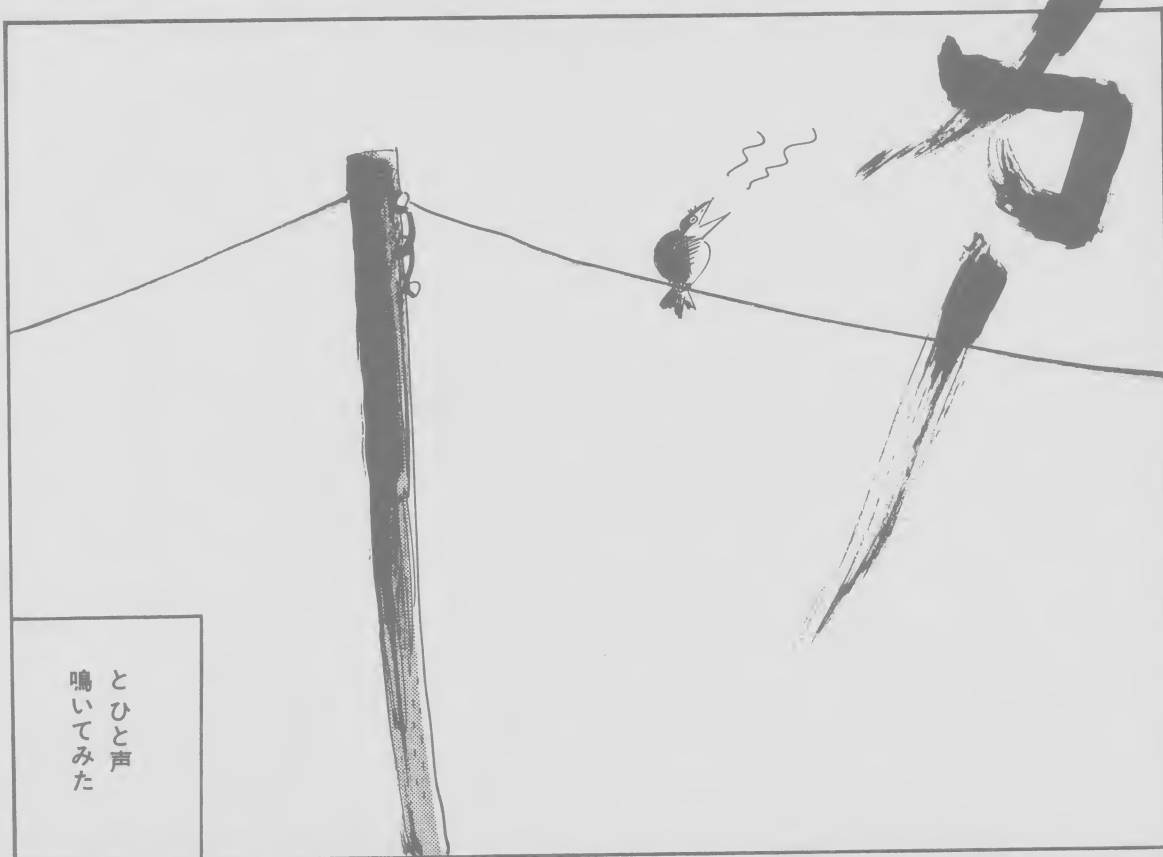
やさしい気持ちで
あたりをながめていられる
自分が



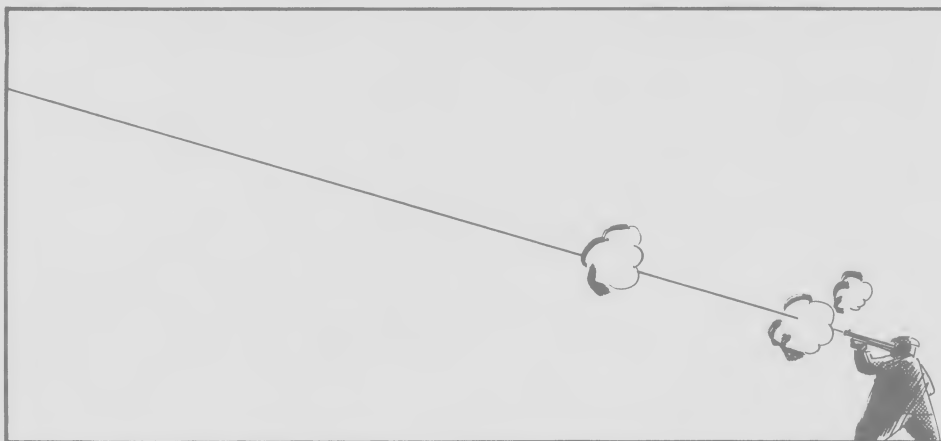
よつぽど
うれしかったとみえ



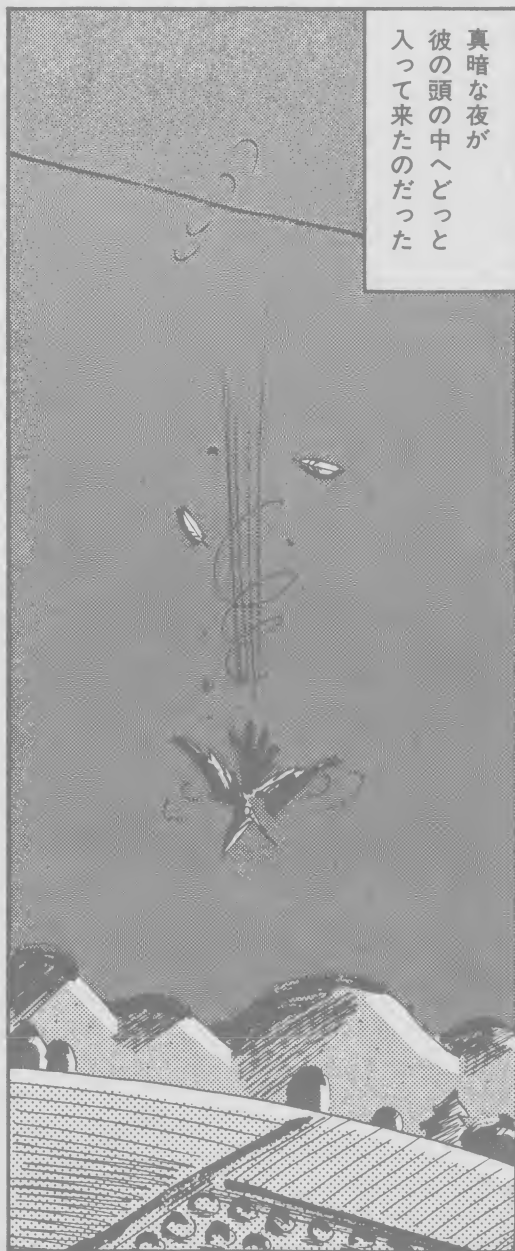
とひと声
鳴いてみた



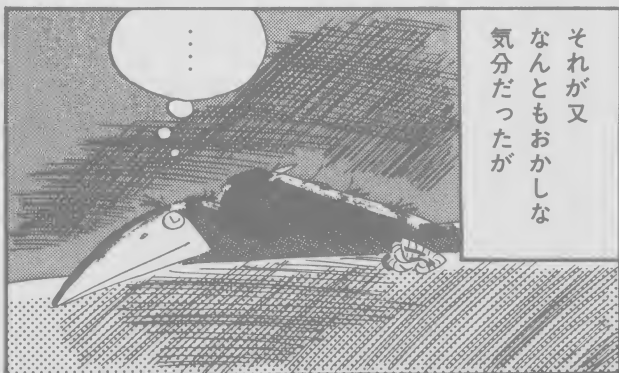
そのせつな
すべてが視界から
消えさったかと
思うと



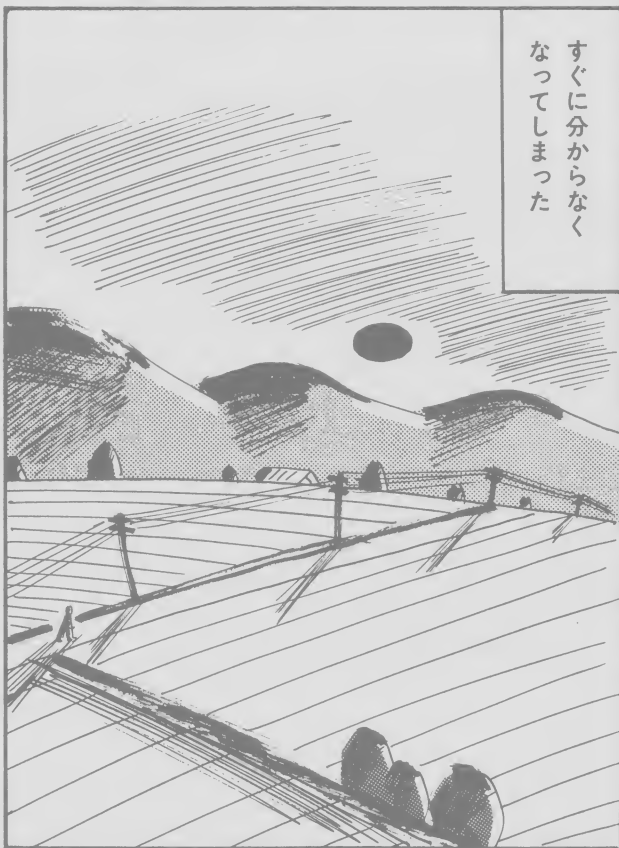
真暗な夜が
彼の頭の中へとつと
入って来たのだった



それが又
なんともおかしな
気分だったが



すぐに分からなく
なってしまった



そして彼の上に
しめやかな夜が
おとずれた時



彼はふたたび闇の中へと
飛びたって行った...

